はくさん

第2巻　第1号

石川県白山自然保護センター

もくじ

奥美濃の大蛇伝説……吉田幸平…1

白山の植物社会の概説……福嶋　司…3

白山麓の焼畑1……松山利夫…6

山　日　記……8

石川県の自然公園3

白山一里野県立自然公園……柳田　亨…9

た　よ　り……10

表紙解説

導標，みちしるべ

しるべは知方（しるべ），すなわち「みちびく」の意味を持っています。道を行く人の便宜のために建てられています。それは、あるいは堂々とした石の角柱であり、またあるいは粗末な一片の木ぎれのこともあります。

路傍にあって，年々の風雪に耐え，その年輪を刻んでいます。それはまた，おのずから周囲の自然との調和を生んでいます。しかし周りのものと異なるのは，それが風景の中に埋没しながらも，己のもつ使命―位置，方向，里程等を知らせる―ということを忘れていないことです。

山に登る。導標がある。登山者にとって，それは山の案内者であり，なによりの身近な友でもあります。一番身近なものであるからこそ，時には1本の導標の存否が登山者の生命にかかわることもあるこの〝みちしるべ〟を私達は愛し，いつまでも大事にしたいものです。

〈自然保護課〉

奥美濃の大蛇（おろち）伝説

吉　田　幸　平

I

白山から西南に連なる両白山地の西端に近く，能郷白山（1617 m）があります。この山麓の揖斐川・根尾川流域一帯が，奥美濃とよばれるところです。

奥美濃には，いくつかの伝説があり，そのあるものは現在まで語りつがれてきています。そこで，「岐阜県の伝説」という本のなかから，奥美濃に残された2，3の伝説を紹介して，伝説に託された，昔の人達の考え方をさぐってみます。

II

雨ごいをしなくなった村　　米つくりをするお百姓さんにとって，水は大切なものです。とくに用水もつくられていなかった昔は，田に水を入れるのに随分苦労したものです。まして日照りが続き，雨の降らないときは，田の水もかれて米は不作です。このようなときには，「雨乞い」をしました。神さまにおねがいして雨をふらせてもらうのです。ところが，郡上（ぐじょう）の八幡町にある五町という部落では，何時（いつ）ごろからか，どんな日照りが続いても，雨乞いをしなくなったといいます。

もともとこの部落では，雨が降らないと神さまにお祈りするならわしがありました。ある年のことです。毎日暑い日が続き，もういく日も雨が降りませんでした。山あいにあるこの部落では，田の水もなくなり稲が枯れそうになりました。村人達は集まって，雨乞いの相談をするのでした。

いよいよ雨乞いをする日がきました。人々は朝早くから準備をすすめています。まず，もちよったわらで胴のまわり一米（メートル）もある大きな滝をこしらえます。そしてできあがった竜をみんなでかつぎ，大矢渕とよばれる渕まではこび，それに酒をそなえました。

その前に座った人びとは，「私どもは，いま田畑の作物がかれそうになって，こまっています。どうか雨を降らして下さい」と，何度も何度もお祈りするのでした。お祈りが終ると，おそなえのお酒をさげて，みんなで飲みました。

さて，一通りの儀式が済むと，みんなで竜をもちあげ，大矢渕へなげこみました。すると竜は，生きているかのように波をたてて渕を三回程まわり，静かに沈んでいきました。

その時です。いままで晴れわたっていた空が急にくもり，大きな雷とともに大雨が降りだしたのです。人々は濡れるのもかまわず，おどりあがって喜ぶのでした。久し振りに降った雨で，作物も草木も生きかえったようです。ところが，一日たち，二日たっても少しも雨がやみません。

はげしい音をたてて降り続くのです。あれほどまちこがれた人々は，こんどは大雨のために川の水があふれ，反対に作物が水にかくれてくさってしまいそうになると，「よく降る雨だ，早くやまないかな」などと空をあおいで語りあうのでした。これ以上降られては，いよいよだめです。相談した人びとは，もういちど大矢渕へいって，今度は，「もうこれからは雨乞いをしないので，雨をやめさせて下さい」と祈るのでした。すると，今まではげしく降り続いた雨が「ピタッ」とやむではありませんか。このことがあってから，五町では雨乞いをしなくなったということです。

鉄のきらいな大蛇　　郡上（ぐじょう）郡の白鳥町に，「村間ケ池」という池があります。この池は，前谷という部落の山の上にある大きな池です。まわりには、大きな木がはえてひるまでもうすぐらく，むかしから大蛇がすんでいるというので，人々はあまりこの池に近よら

ないということです。

さて，昔むかしのことです。この部落に番所がありました。そこにひとりの子どもがいました。毎日，野山をかけて遊んでいました。そんなある日のこと，鎌を持出した子供は，近くの山へでかけました。竹で笛を作ったり，木を切って刀を作ったりして遊ぶのでした。

夢中で遊んでいるうちに，池の畔(ほとり)まできました。うす暗い池には霧がたちこめ，あたりは「シーン」として，静かでした。ちょうど目の前に，藤の蔓(つる)が木にまきついていたので，子供はそれを切ろうと思いました。とえろが，力を入れすぎたので，手もとがくるい，そのいきおいで鎌が池の中へ落ちてしまいました。「あっ，しまった」とおもいましたが，もうどうしょうもありませんでした。

その時，いままで静かであったあたりが，急に騒しくなりました。風が吹き出したのです。木の葉がゆれて山にこだまするのです。すると次第に暗くなり，池の水面もなみがたっているようです。やがて大雨が降り出しました。子供はいそいで家へ帰りました。ところが何時(いつ)までたっても雨がやみません。ますますはげしく降るのです。村人は心配しはじめました。

これ以上雨が降ると，山の上の「村間ケ池」の水かさがふえ，山ぬけ（山腹の一部の土砂がくずれ落ちること）がするというのです。そうなれば，村はひとたまりもなくおし潰(つぶ)されてしまいます。

「こまったことだ。なんとか雨がやむようにしなければ」

と，もう気が気でなりませんでした。そのうちにこの雨は，

「きっと池にすむ大蛇が降らせているにちがいない」

ということになりました。でも誰も池へいった人がありませんでした。その様子(ようす)を見ていた子供はなんだかこわくなって，「私がいきました。そして鎌をおとしてしまいました」といいました。この話を聞いた村人は，きっと鎌のせいにちがいないと思いました。そこで落した鎌を池から拾いあげることになりました。

一人の男が池へ飛び込みました。あちらこちらさがして，ようやく見つけて拾い上げたのです。すると今まで降っていた大雨が，うそのように止むではありませんか。村人達もやっと安心するのでした。

さて，鎌を落したために雨が降ったというのは，なぜだったのでしょうか。そうです。池にすむ大蛇は鉄が一番嫌いだったのです。池に落ちてきた鎌をみて，大蛇があばれだし，そのために雨が降ったというのです。不思議なことですね。それいらい，この池へは鉄でできた鎌や道具を絶対に入れないという，習わしができたということです。

III

ここに紹介した2つの伝説では，竜も大蛇もともにおろち(大蛇)であり，これは普通の者ではとても勝てないほど，ときには神さま（神格化）とさえなっていることがわかります。また，「鎌が嫌いな大蛇」からは，大切な鉄でできた道具を粗末にとりあつかったためのたたりとして，山ぬけするほどの大雨が降ったと説かれています。つまり，これらの伝説をよく読むと解るように，大蛇(おろち)伝説には，鉄器をもっている民族の考え方がみられます。それと同時に，大蛇が水神・雷神としての性格をもっていることが示されています。

こうした伝説のなかの大蛇は，田植えの季節になると山から田におりてくる「田の神」と性格が似ているともいえるのです。

いろんな地域の，いろんな伝説を読むことから，その地域や伝説が語られていた時代の人々の考え方を知ることは，大変むつかしいことですが，またロマンチックな楽しさをも秘めているのです。

〈岐阜中部女子短期大学〉

白山の植物社会の概説

白山の垂直植物帯と植物社会の分布

福　嶋　　司

白山は御前峰（2702 m）を中心とする独立峰で中部日本の日本海側に位置する本州最西端の高山です。白山より以西には2000 mをこす山岳は存在せず，植物の分布の上からも白山を分布の西限とする植物も少なくありません。白山地域は御存知のように冬季多雨の日本海型の気候区にはいり多量の積雪をみます。このような多雪気候下では耐雪性を有するブナ林やダケカンバ林が優勢に分布します。従いまして冬季積雪の少ない表日本の高山とは植物帯や植物社会の分布の様子もおのずとちがうはずです。すでに白山においては正宗厳敬，堀川芳雄，安藤久次，河合功，里見信生，鈴木時夫，菅沼孝之，中西哲等の各氏がいろんな方面から植物について精力的に研究を進めておられます。その結果として，これから述べて行きます白山の植物群落（植物社会）についても詳細に解明が成されております。これら先人の成果を基にして若干の私見も加えて，これから白山の植物群落の分布について述べてみたいと思います。すでにこの本誌で菅沼孝之氏が「白山の植生」としてシリーズで白山の植物群落の特性について書いておられますので一部重復する所もあるかと思い，また同時にお読みになられるとさらに詳しくおわかりいただけるかと思います。

植物帯という言葉を使いましたが，これは植生帯と言われるもので，ある特有の植物及び性質の似た植物の仲間が広く分布することを言います。ここで扱おうとしているのはこの広がりの垂直的な重なり，つまり白山をハチマキを巻いたようにとりまいている垂直植生帯です。この垂直植生帯は気温や降水量のちがいによって，高度により分布する植物社会が異なることを言います。日本のように年間を通じて降水量の多い地域では，それは主に温度により決定されると言われています。白山のような多雪の高山では，温度の外に冬季における大陸からの強風や雪も分布を制限する要因になっております。この事実は日本海側の高山に共通していることで，高山の頂上部程，その傾向が著しく現われます。（はくさん，第1巻3号4—5 P参照）

ではこれから，垂直植物生帯を低海抜地域から見ていきましょう。

A　常緑広葉樹林帯（低地帯～丘陵帯下部）：（自然林→スダシイ群団，二次林→クリ群団，アカマツ群団）

海抜0～350 m（400 m）までがこの帯と考えられ，年間を通じて常緑のスダシイ，タブ，ウラジロガシなどがこの帯の代表的な植物です。金沢市，小松市など海抜50 mくらいまではタブ林（タブ—イノデ群集），スダシイ林（スダシイ—ヤブコウジ群集）が分布しますが，鶴来町などやゝ海抜が高くなってくる所では，ウラジロガシ林（ウラジロガシ—ヒメアオキ群集）になります。しかし，これらの林の成立する高度は人間の生活する地域と一致しておりますので，本来，これらの林が広く

分布していたと思われる所も平地は水田や畑に変ってしまっております。また薪炭材をとるために山腹～尾根の林は伐採され，現在ではコナラ林（コナラ―コバノガスミ群集）やアカマツ林（アカマツ―ホツツジ群集）などの二次林になっています。この帯の本来の姿（自然林）は今日ではきわめて少なくなっておりますが，神社の社叢や民家の防風林として認めることができます。自然林は成立高度に若干の差はありますが性格は全国の常緑広葉樹林とほとんど同じものです。

B　ブナ林帯（丘陵帯～山地帯）：（自然林：ブナ―チシマザサ群団，二次林：クリ群団）　海抜350（400）～1650 mにあたるがこの帯です。その主体はブナ林（ブナ―オオバクロモジ群集）です。白山のブナ林（日本海側のブナ林）が表日本のブナ林と著しく異なる点は低木層に常緑の地這性の植物（日本海要素とよばれるもの）を多く有していることで，これは冬季の積雪による寒さからの保護があるためだと言われています。日本海要素と言われているものにはヒメモチ，ハイイヌガヤ，ツルシキミ，ハイイヌツゲ，エゾユズリハ，などがあります。この帯には小面積ながら谷沿いにはサワグルミ林（サワグルミ―ジュウモンジシダ群集），トチノキ林（トチノキ・ジュウモンジシダ群集）が成立しており，尾根の岩角地ではヒノキ，クロベ，ヒメコマツとホンシャクナゲとの結びついたヒメコマツ林（クロベ―シャクナゲ群集）が存在しております。この帯の下部（800 m以下）ではやはり人為の影響を受けブナ林が二次林に代っており，ミズナラ―コナラ林（クリ―コナラ群集）やミズナラ林（クリ―コナラ群集）のような林がほとんどになってしまっております。一度ブナ林が伐採を受けるとすぐにはブナ林へと復えすることはむずかしく，かなりの長い期間ササ原になってしまいます。このササ原を岩間温泉近くの楽々新道の途中でみることができます。このササ原となるのは，チシマザサが低木層に多いブナ林が伐採される時に多いようです。ブナ林の伐採が一部では進められており，これらの二次林やササ原に変ってしまおうとしている所のある事は残念です。この帯の上限付近は，上の帯の植物（ダケカンバ，アオモリトドマツ，ハリブキなど）と混合したブナ―ダケカンバ林とも言える林が不連続な帯として存在しています。

樹海美の代表　ブナ林

C　亜高山帯：（ダケカンバ群団）　海抜1650―2100 mくらいまでをこの帯とみることができます。この帯はダケカンバ林，アオモリトドマツ林によって占められております。表日本の高山と較べますと，白山ではダケカンバ林の占める面積がたいへん広く，アオモリトドマツ林は尾根に追いやられてきわめて狭い面積になっていることがわかります。正宗厳敬氏はこの事実を重視して，白山のこの帯をダケカンバ帯と呼んでいるくらいです。白山と表日本とのちがいは積雪量と関係が深いとされております。ダケカンバ（カバノキの仲間）は積雪の重みに耐える（耐雪性）力が強いという性質があります。これは登山の途中に根元がワン曲したダケカンバの大木をみることができることからもわかります。これに対して，アオモリトドマツは積雪の重みに対してきわめて弱く，すぐに折れてしまいます。アオモリトドマツは耐雪性の植

物に対して嫌雪性の植物と言えると思います。この帯で両方の林の分布をみますと，冬季積雪の多い沢沿いや凹地にはダケカンバ林が分布し，尾根の積雪の少ない（積っても強風によって吹きとばされる）尾根にはアオモリトドマツ林が成立します。そして両方の中間の平地では両方の樹木が林を成しています。砂防新道の甚ノ助小屋までは両方の混った林ですが，小屋より上方では実に明確に分布のちがいが認められます。そこでは分布が尾根と谷に沿って縦縞状に認められます。表日本の南アルプスのこの帯と較べてみますと，アオモリトドマツ，コメツガなどの勢力がそこではきわめて強く一面に広がり，ダケカンバ林はその広がりの上方に幅50～100 mくらいの水平な狭い帯を成しているにすぎません。鈴木時夫氏は裏日本の縦縞状の構造に対してこれを横縞状構造と呼びました。

この帯で尾根の強風地や風の通り道となる凹地では，すでに強風のためアオモリトドマツ林も成立できず，強風と雪の重みに耐えることのできる自然のチシマザサ低木林（チシマザサ—ハクサンボウフウ群集）が分布します。この低木林は白山ではかなり広く分布しており，その代表は南龍ケ馬場にみることができます。この帯でダケカンバ林の所より積雪の多い所ではミヤマハンノキ低木林が成立し，さらに多くなると，上部の高山帯より下ってきた，高茎草原（お花畑）が発達してきます。

D　高山帯：（ハイマツ群団）　2100 m以上頂上部までがこの帯に入ります。研究者によってはヨーロッパの高山帯との比較から，この帯を高山帯とよぶことに対して異議を唱える人もいますが，日本ではこの帯を高山帯とするのが一般的なようです。ハイマツ低木林（ハイマツ—コケモモ群集）がこの帯の代表的な群落です。頂上部やお池めぐりコースでは冬季の強風のためと土壌の不安定のためハイマツ低木林は発達することができず，コメバツガザクラ，イワウメなどの10 cmにも足りない低木やイワツメクサ，イワギキョウなどの草本からなる高山風衝ハイデが分布しています。雪解けの遅い弥陀ケ原，室堂平の一部ではイワカガミ，ガンコウラン，アオノツガザクラ，チングルマなどの雪渓植物社会が分布します。登山者の目を楽しませてくれるお花畑（ミヤマシシウド—ハクサンアザミ群集，ヤマヨモギ—クロバナヒキオコシ群集）が広く分布するのもこの雪の多い所に限られています。白山では本来の意味での湿原は存在しませんが，その傾向をもつものが弥陀ケ原や南龍ケ馬場にあることも付け加えておかなければなりません。

高山地では植物の生長する期間が大へん短いたて夏の短期の間に芽を出し，花を咲かせ，実を作る必要があります。言いかえれば大へん環境条件が悪い所ということになります。冬に積雪の多い所では，遅くまで植物は雪の下ということになりますのでかなり長くの生活ができないことにやります。ハイマツ低木林は雪の少ない所を好みます。反対にお花畑の植物や雪渓植物社会の植物などは生育期間がハイマツ程長くはないので，ハイマツの分布する所とは全く別の所に発達することになります。

1972年3月に，石川県と白山調査研究委員会が発行した「白山植生図」にはその分布の様子が良く現われています。白山自然保護センターにも展示されています。一度ごらんになっていただくとおわかりいただけることと思います。

〈広島大学大学院〉

白山麓の焼畑　I

山地の農業—立地条件—

松　山　利　夫

I

白山麓一帯には，古くから焼畑とよばれる農業がおこなわれてきました。そしてある時期には，炭焼きや養蚕などとともに，これが生活の中心であったこともありました。しかし，いまではもう，すっかりなくなってしまい，私達がどんなにさがしても，伝統的な方法を伝えている焼畑を，見つけることはできません。

それで，私達の祖先がおこなってきた白山麓の焼畑農業について，これからしばらくの間，書いていきます。もしできれば，白山自然保護センターの展示，「ヒトのくらしと自然」の参考にしていただければと思います。

II

焼畑という農業は，だいたい山地の農業だといえます。とくに，沖積平野などの低平地が，耕地や集落などの利用のために開発されつくした日本のようなところでは，山地にだけみられる農業だといえましょう。

山地といえば，うっそうと繁る森林や急傾斜地を，すぐに思いうかべる人が多いことと思います。でもちょっとまって下さい。いま，私達のまわりにある山は，たくさんの樹木が繁茂する森林におおわれているでしょうか。そういう山は，よほどの奥地へいっても，今ではなかなか見つけることができないと思います。それどころか，山によっては樹木のはえていない部分があるくらいです。

白山へ登るために，自然保護センターを訪ずれるためになど，いろんな目的で白山麓をたずねたことのある人は，道すがらこのことを自分の目で見て，観察されたことでしょう。

ではどうして，今みるような貧弱な林になっているのでしょうか。この理由は大変複雑で，一口にいいきってしまうことはできません。ただいえることは，1つには，人間がいろんな目的で森林を伐採したり，焼いたりした結果だと考えられることです。つまり，人間が自然に働きかけた結果だといえます。また1つには，地辷(じすべ)り，雪崩(なだれ)などの自然の営みによって，樹木の繁茂していたところが破壊されたりしたということもあるようです。

このように，山地といっても必ずしも大木が繁る森林ばかりではありません。高茎草原とよばれる，ヤマヨモギ・ハクサンアザミ・シシウドなどの丈の高い草ばかりで樹木がなかったり，雑多な低木やササなどからなるブッシュとよぶところもあるのです。

III

さて，焼畑は山地にひらかれた畑に火入れして作物を栽培する農業ですが，これは大木の繁茂する森林で営まれることは，まずありません。というのは，山地の斜面に畑をつく

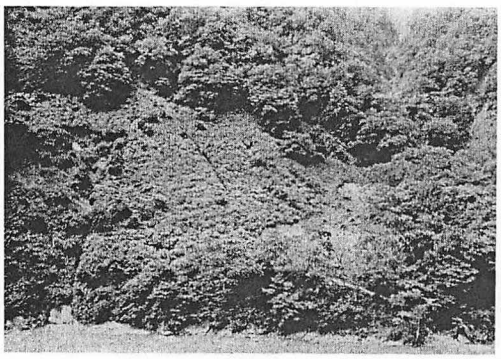
るために，樹木を伐ったり，草を刈ったりしなければなりません。それに，これだけでは畑に使えませんから，伐った木を整理して，さらにこれを燃やすわけです。そのあと，石や木の根などを取り除き，簡単に整地してはじめて畑となるのです。ところが，大木があると，まず伐りたおすのが大変ですし，火をつけて燃やしても，樹皮が焦げる程度でヤケボックイになって残ってしまいます。そうすると，農作業の邪魔になるし，ときにはヤケボックイが芽をふいて葉をしげらせ，畑の陽あたりを悪くします。そんなわけで，焼畑は，大木の少ないブッシュや高茎草原に好んでひらかれたわけです。

焼畑は山地の農業だと書きましたが，まだ残しておいた問題があります。それは，山地斜面の傾斜と海抜高度とです。

日本のような新期造山帯に属する地域の山地は，いわゆる壮年期の急峻な山岳が多いのです。したがって，急傾斜面がよく発達しています。ですが，もう少し小さな範囲に限って細かく見てみると，規模は小さいけれども，けっこう平なところや，緩斜面があるものです。こうした場所をみつけて，畑をひらいていくわけです。しかし，いくら傾斜が緩やかでブッシュや高茎草原であっても，白山の南龍ヶ馬場（2100 m）のように海抜高度の高いところは，焼畑にはむきません。それは作物の成育にとって必要な温度（これを積算温度といいます）がないからです。したがって，白山麓の場合ですと，焼畑の高度による限界（高距限界とよく表現されます）は，だいたい1000 m～1200 mぐらい，おおまかにいっていまの国有林界前後のところだったといえそうです。

これらのほか，陽あたりや風，ナダレの危険度など，いろいろの条件があります。こうした種々の条件をみたす場所にのみ，焼畑がひらかれるわけで，決して単純な話ではないのです。

今回は，焼畑の立地条件について，書いてみました。次回はこうしたことを基礎に，焼畑の分布をみてみようと思っています。　〈研究普及課〉



ジライ谷のナバタ（高茎草原）とブッシュの景観

山日記

春山シーズンをひかえて

今日（4月11日），白山室堂の管理者である白山観光協会の人や白峰村長それに私とで，今春の山開きが例年どおりやれるものかどうか，風嵐部落の方面を視察してきた。もう一週間も前から除雪作業が進められているのに，風嵐の奥2km ほどしか除雪は済んでいなかった。道の両側にはジープの屋根より高い雪の壁が出来ている所もあって，3月20日には市の瀬まで除雪を完了していた昨春と比べると，今冬の雪がどんなに多かったことか改めて知らされる思いがした。今年の冬は白峰で越冬したが，その間には，腰まで雪に沈みながら13km の道のりを市の瀬まで除雪作業に入った人達から，彼の地の様子をしばしば聞いた。倉庫と飯場が押しつぶされたこと，営林署の事務所の一部が落ちたこと，「すっぽり雪に埋った事務所を永年のカンで見当をつけて堀りあてた」ことなど，何れも雪の量が普通でなかったことみ教えるものだった。

昨日，白峰の川岸にもやっとフキノトウが頭を出して開きかけたのをみた。去年の11月18日からの3日間切れめなしゐ降った初雪に驚ろかされてから5ヶ月になろうとしている。アノラックも，つい4・5日前着けずに済むようになったばかりで，長い冬であった。

今月の27日から室堂を開くことになっているが，白峰から市ノ瀬の間はなだれが出る事も予想され，ゴールデンウィークに登山する人の安全確保が出来るかどうか難かしくなってきた。「4月末にはどれだけ雪があろうと消える」と言う人，「今年は特別だ。5月中旬までは人は通さない方がいい」と言う人があって，いつ室堂を開くか，観光協会をはじめ考えあぐねている。

春山は比較的登り易いので軽装になりがちだが，昨年も春に転落事故があったし，5月末の室堂で，3日間粉雪の舞う吹雪に会い全く行動できないこともあった。いったん天気がくずれると冬山同然になる。ガスの弥陀ヶ原などでは方向感覚が鈍り，以前人が通った跡でも発見できなければ，室堂まで無事通過することはまず無理であろう。春山では，積雪の状況，小屋の状況をよく調べ，天候に十分な留意をしてほしいものだ。住所氏名，連絡先，行程の詳細などの登山者名薄への必載も厳守してもらいたいと思う。

以前，やはり5月の連休に，大汝峰と御前峰の鞍部，室堂から2km たらずの所で死んだ人がある。どこでもビバークできるだけの装備と食料，体力と冷静な判断力を持たなければ，5月の白山登山はやめた方がよい。ハイキングなら，1000 m程度の山へ入って，コブシの咲く屋根から，白山の雄大な姿を楽しめよう。

昨年の子供の日に加越国境の取立平に行って，ミズバショウ・コブシ・ショウジョウバカマの美しい花々と，白山の雄姿をながめながら弁当を開いた楽しさを思い出す。これより少し前，すでにスキー場が閉鎖された鶴来のししく高原へ行って，尾根を少し歩いてみたとき，沢すじにヤブツバキが広がり大きな花芽をいっぱいにつけているのを観た。この分だと5月の連休には赤いツバキの花が楽しめるのではと思ったことだった。手取川が南から西へ大きくカーブして日本海にそそぐさまが美しく，扇状地上に点在する屋敷林を眼下に見おろす気分は，なかなかえがたいものであった。

〈自然保護課〉

石川県の自然公園　3

白山一里野県立自然公園

白山から流下する河川の一つに目附谷(めつこだに)川があります。この川が手取川の支流尾添(おぞ)川に合流する付近に小規模な河岸段丘があり，そこが40 ha ほどの白山麓では貴重な農耕地になっています。この農耕地一帯は通称「一里野」と呼ばれています。この「一里野」を中心に西は荒谷より東は白山国立公園まで，北は尾添川から南は白山主峰より北方に向かって伸びる主稜に接した区域の1,826ha が「白山一里野県立自然公園」に指定されました。

昭和48年9月1日に誕生したこの自然公園は，北部白山の利用動線上に位置し，白山国立公園の利用計画上重要であるといえます。

この公園の特徴について簡単に説明してみましょう。

1　現況と特性について

イ　地形・地質

本公園は大きく2つに分けることができます。一つは白山山塊の白山主峰から北方に向かって伸びる主稜の尾添川に面する急峻地帯，もう一つは一里野地区の河岸段丘地帯です。これら地域は中生代手取層群，先ジュラ紀の片麻岩類を基盤にしています。

ロ　地　　被

尾添川周辺にはスギの人工林が散在しており，その他はコナラ，ミズナラ，カエデ等の落葉広葉樹林で占められています。秋には，これがあざやかな色どりをそえています。

ハ　特殊景観

この県立自然公園には，各種の動物がかなり生息していると思われ，昭和40年頃から始められた白山の学術調査結果からかなりのことが知られています。おもなものでは，ツグミ，モズ，アトリ，ヒワ類，ウソ等の鳥類，イワナ，カジカ等の魚類，ツキノワグマ，ニホンカモシカ，ニホンザル等の大型哺乳類が見られます。

名勝，史跡が尾添川沿い，荒谷，ハライ谷等多く存在することも特徴といえましょう。また，白山信仰に関係する諸事象も郷土史上貴重といわれています。

2　保護について

この公園は，全般的に風致の維持に留意し，利用との調整をはかる方針です。特に利用が集中すると思われる一里野地区では積極的な利用が予想され，景観造成，修景緑化の増進が望まれます。公園全体の規制は，石川県立自然公園条例により，次に述べる行為は前もって県知事に届け出なければならないことになっています。

○基準以上の工作物を新築し，改築し，または増築する場合
○広告物等を掲出する場合
○土地の形状を変更する場合
○鉱物の堀削や土石を採取する場合

3　利用について

この県立自然公園には「白山一里野国民休養地」の計画があります。国民休養地は近年における野外レクレーションの需要の増大に対処するため，国の補助により，都道府県立自然公園等の休養適地に駐車場やロッヂなどの公共施設，宿舎，運動施設，園地などを集中的に配備して，国民の保健，休養に役立たせようとするものです。

白山麓唯一の平担部である一里野は，金沢，小松両市の近郊利用圏内に位置することや，近時着々と進められている県道岩間瀬戸野線，昨秋貫通した白山スーパー林道の到達道路の整備により，公園利用の増大が期待されています。

〈柳田　亨〉

たより

◇雪のことなど　白山麓にもようやく春がきました。ブナの若葉が気持よく眼にうつります。この冬は雪が深かったせいで，とくに美しく感じられます。

3月の末頃でも，蛇谷のセンター周辺では，4mもの積雪がありました。そのなかを，センター職員が除雪に出かけ，冬の間の動物の調査や生態写真を撮影することともに，こうした目的で来られた方々のお手伝いをしてきました。この人達の努力の結果は，いずれこの雑誌をにぎわせてくれることでしょう。

ところで，センターまでの道路の除雪を，4月末からおこないましたが，あまりの雪のためと，皆さんの安全とを考えると，展示室の開館は5月の上旬すぎになってしまいそうです。ですが，それだけにまた，渓谷の春を皆さんに堪能していただけることでしょう。

◇展示の充実へ　昨年は開館1年目で，展示も基礎的なものが中心になっていましたが，今年からは，少しづつ充実させていきたいと考えています。そのはじめに，「ヒトのくらしと自然」のコーナーを一部手なおしし，伝統的な生活用具のいくつかを展示することになりました。武骨ではあっても機能的につくられたこれらの民具とその素材から，かつての人々の暮しをしのんでいただこうと思っています。

また，白山頂上附近と蛇谷地区の航空写真を展示し，空からみた景観を居ながらにして楽しめ，理解できるようにしました。これとともに，白山全域にわたる立体地形模型も用意するなど，いろんな角度から白山を知ることができるよう配慮したつもりです。

センターをおとずれた人達の多くが，大変な関心をもっているニホンザルについては，今年は7月と8月に，サルの立体的な解説を試みた特別展「白山のニホンザルの生態」を催します。より深くサルを知るために，来館いただければと思っています。

◇お願い　この雑誌も，ようやく通巻第7号を発行できることになりました。これを機会に，一部雑誌の体裁を変えたところもありますが，昨年と同様，御意見をおよせいただきたく思っております。とくに，〝こういう記事を〟というような御希望がありましたらおきかせ下さい。私達で困難なことであれば，適当な方に原稿を依頼することも考えています。

今年も皆さんのあたたかい御支援がいただけますよう，職員一同，お願いいたします。

はくさん　第2巻　第1号（7）

発行日　1974年4月20日
発行所　石川県白山自然保護センター
石川県吉野谷村市原
印刷所　株式会社　橋本確文堂